

## 国土審議会第6回計画部会

(奥野部会長) それでは、定刻になりましたので、ただいまから国土審議会第6回計画部会を開催いたします。

本日は、大変お寒い中、またお忙しい中、遠路ご苦労様です。

最初に事務局から、会議の公開、会議資料の確認をお願いします。

(国土政策局総務課長) 当部会は、国土審議会運営規則に従い、会議・議事録ともに原則公開とされており、本日の会議も一般の方々に傍聴いただいております。この点につきまして、あらかじめご了承くださいませようをお願いいたします。

なお、現時点での出席委員は12名でございまして、ちょっと遅れている委員がいらっしゃるようですが、定足数を満たしておりますことを念のため申し添えます。

次に、議事に先立ちまして、お手元の資料の確認をさせていただきます。

クリップを外していただきまして、議事次第、座席表とありまして、資料の1が、国土審議会計画部会委員名簿、資料2が、新たな国土形成計画の中間整理案、資料の3が、計画部会の検討スケジュール、このほかに参考資料として、第5回計画部会の意見要旨をお付けしております。

また、藤原委員から、資料のご提出がございましたので、併せてお配りしております。

以上の資料につきまして不備がございましたら、事務局までお知らせください。

ございませんでしょうか。

でしたら、よろしく申し上げます。

(奥野部会長) それでは、本日の議事に入ります。カメラによる撮影は、ここまでとさせていただきますので、ご協力をお願い申し上げます。

本日の議題は、「中間整理の案について」であります。

議題について、事務局から説明をお願いいたします。

(国土政策局総合計画課長) それでは、ご説明をさせていただきます。

資料2-1が、概要として作らせていただきました1枚紙でございまして、資料2-2が本文でございます。基本的には、本文を中心にご説明をさせていただければというふうに思います。

資料2-2をご覧ください。

まず目次が載っておりますが、前回、素案をお示しさせていただきましたけれども、3章構成になってございまして、第1章は、国土に係る状況の変化、これは前回も文書で素案の段階でお示しをさせていただいております、ほとんど変わってございません。

それから第2章国土の基本構想、ここが総論の総論部分でございまして、前回第5回の

部会でご議論いただいたことを基に、文章で書き下ろしを新たにさせていただいたものでございますので、第2章を中心にご説明をさせていただければと思っております。

それから第3章は、第2章を受けて具体的な方向性を書くものでございまして、これまでご議論いただいた6つの指摘に分けて書かせていただいております。

これ前回の素案でお示しをいたしましたとおりの箇条書きをさせていただいております、それがそのまま変わってございません。若干、前回のご議論を踏まえて追加修正したところは、後ほどご説明をさせていただきたいと思っております。

では、1枚をめくっていただきまして。最終の論点整理の案ということでございまして、「はじめに」というのをつけさせていただきました。ここは、これまでの議論の経緯を書かせていただいております、計画部会はということで、2行目に、10月の発足以来、新しい全国計画について鋭意検討を進めてきたということでございます。本中間整理は、計画部会におけるこれまでの検討の論点を整理したものであるということで、この中間整理の性格づけを書かせていただいております。

今後ということで、今後のスケジュールも書かせていただいておりますが、この中間整理を基にして、2月中を目途に中間とりまとめを行い、中間とりまとめを足がかりとして最終報告のための検討作業を継続していくという今後のスケジュールを書かせていただいております。

引き続き第1章ということで、状況の変化を書かせていただいております。これは素案とほとんど変わってございませんので、説明は省略をさせていただきます。

ちょっとページ飛びまして7ページでございます。第2章国土の基本構想の部分。これは前回、項目だけを示しさせていただきましたご議論いただいた部分でございますので、文章として書き起こさせていただきました。7ページ一番上のところで、この計画ではということで、今後おおむね10年間における国土の形成に関する基本的な方針として、第1章の変化を踏まえて、引き続き、経済成長を続け活力ある国として国際社会の中で存在感を維持し、国民1人1人が豊かさを享受できる国土づくりを進めていくこととするということで基本的な方針を書かせていただいて、これは前回、お示ししたとおりでございます。

そのあとの第2段落目が、ちょっとかなり詳しく追加をしておるところでございます、野城委員から、イノベーションが大事で、対流というのが1つの環境整備につながるんだというようなご指摘がございましたので、その部分を詳しく書かせていただきました。

まず、日本というのは、世界でも類を見ない多様性を持つ国だということで、各地域が個性と価値を改めて自覚し、これを深めていくことによって、人々が地域への愛着を強めていくことが必要であるということ。

それから、異なる個性を持つ各地域が主体的に連携し、ヒト・モノ・カネ・情報が活発に動くことによって活力が生み出されるということで、「対流」という、まだ言葉は出ておりませんが、そういうヒト・モノ・カネ・情報が活発に動くことが非常に重要なのだということを書かせていただいております。

さらにということで、日本というのは、今後ともイノベーションを幅広く創出することが不可欠でありまして、そのイノベーションというのは、ヒト・モノ・カネ・情報が流動し、交わり、結びつきながら、新たな仕組み、組織、プロセスを創造されることとなりますので、そういうイノベーションの創出に必要な環境整備を進めていく必要があるということでございます。

このようなことを踏まえて、一番最後のパラグラフにもございますとおり、地域間におけるヒト・モノ・カネ・情報の活発な動きである対流が、全国各地でダイナミックにわき起こる国土の形成を目指していくということを、国土の基本構想として打ち出させていただいております。

第1節で、対流促進型国土の形成ということでございます。

(1) 対流の意義でございますが、ここは、対流の意義づけのところで、ちょっと対流というのは物理学用語でございますので、詳しく解説をとということでございますので、流体内において温度差により流動が生じることであるが、これを国土政策に援用してということで、地域間のヒト・モノ・カネ・情報の双方向の流れにするということ、ちょっと詳しく書かせていただいております。

それから、次のページに行かせていただきます。

あとは、その意義づけのところにつきましては、前回お示したものと同じでございますけれども、(2)の対流の発生、維持、拡大と対流促進型国土の部分で、対流の発生、維持、拡大には5つの要素があるようなことを前回ちょっとお示しさせていただきましたが、対流が発生していくプロセスが分かりにくいというご意見がございました。

それから家田委員のほうから、コンパクトってということも要素の1つで入れたらいいのではないかというお話がございましたので、そういうことを踏まえて、ちょっと書き下ろしてございます。1行目でございますが、まず地域は、地域独自の個性を見つけ出して磨いていくということです。

そういう中で、そのパラグラフの一番下にありますように、地域の1か所にコンパクトに集積することが、個性を鮮明にする場合もあり、有用であるということで、ここで「コンパクト」という言葉にさせていただきます。

それから同時にということでございまして、コンパクトにより、地域の生活サービス機能等を集約して定住環境を確保していく必要があるということ。

それから、ヒト・モノ・カネ・情報のスムーズな流れと連携を支える良好なネットワークが必要であるということでございます。

さらに、異なる個性が連携して新しい価値を創造させるためには、創造する意欲と創造の場（対流拠点）が必要であるということで、その要素を順番にご説明をさせていただいて、かつ、その温度差がなくなってしまうと対流はなくなってしまうので、温度差を作る、創造する意欲と創造の場を持ち、新たな地域の個性を見出し磨き上げることによって、温度差を作り続けることが必要であるということで整理させていただきます。

それから9ページに行ってくださいまして、対流を起こす源になる、あるいは、そういうことを対流を起こしていく主体として地方の大学等が使えるじゃないかということでございますので、9ページ目の一番下のパラグラフ、例えばのところですけども、地方の大学等教育・研究機関という話、それから、民間企業もそういう役割を果たせるんじゃないかというお話もございましたので、また、大都市の民間企業が地方と連携して対流を発生させる場合も想定されるというようなことも書かせていただいております。

それから第2節でございます。

対流促進型国土の形成を図るために、コンパクト+ネットワークを進めていくということで、重層的かつ強靱なコンパクト+ネットワークを第2節にさせていただいております。

1つ目の括弧はコンパクトの意義のところ、コンパクト化の意義と新しい時代のコンパクトということで、必要な機能を一定の地域に集約化すること、それによって、サービスの効率的な提供を可能にするというようなことが、コンパクト化の意義として書かせていただいております。

第2パラのところは、災害発生のおそれの低い土地への集約によって安全性を高めるということは前回もお示しさせていただきましたけれども、熱の有効利用の観点から、コンパクト化に意義があるというご意見ございましたので、その第2パラのところ、最後のところに書かせていただいております。

それから、9ページ下のところのネットワークの必要性の部分でございます。コンパクト化だけではなくてネットワークによって結んで、圏域人口を拡大することによって機能を維持していくことだということを書かせていただいておりますが、それにプラスということで、コンパクト化だけではすべての機能を賄えないので、コンパクト化した地域が役割分担を行ってネットワークで結ばれることによって、必要な機能を享受することができるようになるのではないかというご指摘ございましたので、それを、10のページのさらにのところに、第2パラのところに新たに入れさせていただいております。

それからあとは、前項お示した項目に従って書かせていただいておりますので、省略させていただきます。

前回、計画部会のご議論の中で、こういうコンパクト+ネットワークは、実際都市の中でどのように展開されるのか、ちょっと分かりにくいというご意見。特に30万人都市ぐらゐの地域、それから、あるいはブロック中枢都市辺りの都市でどうなるのかっていうのは見えにくいというお話もございましたので、11ページのところに第3節ということで、これは新たに書き起こしをさせていただいた節でございますけれども、地域別整備の方向ということで書かせていただきました。ちょっとちっちゃい、ちっちゃいといひますか、人口規模の小さな地域から順番に大きな地域へという流れで書かせていただいております。

1番目が中山間地域等ということで、中山間地域等における人口規模の小さな地域から、

まずコンパクト＋ネットワークは、どんな形で作られているかということを書かせていただいております。

生活サービス機能をはじめとする各種機能を集約した小さな拠点、中山間地域等では小さな拠点ということで、その形成・活用を戦略的に進めるということでございます。

生活サービス機能を維持する、守るという守りの立場だけではなくて、第2パラにございますとおり、ヒト・モノ・カネ・情報が集まり新しい価値を創造する場として、攻めのコンパクトということもございますが、そういう役割を担うような可能性を有していますので、そういう両者併せ持つ新しい時代のコンパクトにも取り組んでいくんだということを書かせていただいております。

それから、2つ目の括弧、地方都市でございます。ここはちょっと、数万人それから数十万のところで、非常に幅広い都市が入ってきますので、若干ちょっと書き分けをさせていただいておりますけれども、基本的には地方都市につきましては、コンパクトシティの形成を進めるということでございます。

そういうものを地方都市に立地する機能というのは、人口規模で、ある程度決まっておりますので、人口規模に応じた都市圏が多層的に重なることになるんだというイメージを持っておりまして、人口がおおむね数十万人未満の地方都市におきましては、小さな拠点を含むその都市圏内の居住者等に対し一定の都市機能を提供するということでございます。

と同時に、より高次の機能につきましては、近接する都市とネットワークでつながって役割分担の中で都市機能を整備していく、都市機能を形成していくということ。それから、あるいは、近郊の県庁所在市または人口がおおむね数十万人以上の地方都市と連携して、高次都市機能を提供する、あるいは享受するという形になるのかなといったところでございます。

それから12ページ、2つ目のパラでございますけれども、県庁所在地または人口がおおむね数十万人以上の都市におきましては、高次都市機能を提供するとともに、地場産業の競争力強化、海外事業展開等のための機能の集積、地域の産業集積を進めていくための機能を有するというのを整理する形でございます。

次、12ページ1つ目の括弧、広域ブロックの中心的な都市、ここは広域ブロックの中心的な都市ということ想定しておりまして、いわゆるサスティンブロックといいますか、ブロックの中で一番大きな都市を念頭に置いてございますけれども、国土形成計画も、そういうブロックごとに広域地方計画を今度作っていくわけになるわけでございますけれども、前回の計画で打ち出しましたとおり、広域ブロックが地域の資源を最大限に生かして地域戦略をやることによって、地域全体の成長力を高め自立していくという、そういう国土構造を目指しているわけでありまして、広域ブロックの中心的な都市におきましては、そういう広域ブロック経済の牽引役となり得るような産業、成長産業の集積を進めていくということを書かせていただいております。あるいは、大都市圏のネット

ワークを形成して、全国的な対流の拠点となるというようなことを想定しております。

それから、なお以下でございますけれども、地方都市それから広域ブロックの中心的な都市、ここは規模にかかわらず、やはり海外というのを意識しながら、海外とのネットワークを形成して、海外との対流の拠点となるようなことも考えなきゃいけないんじゃないかということ。

それから、特に日本海側におきましてはユーラシアダイナミズムというような動きもございますので、そういうことも念頭に置きながら、コンパクト+ネットワークを進めていくんだということで位置づけさせていただいております。

次、大都市圏でございます。

これは三大都市圏を念頭に置いておりますけれども、東京圏をはじめとする大都市圏におきましては、人口減少に伴う開発圧力の減退等を契機として、都市のイノベーションを進めていく。あるいは、こういう大都市圏におきまして、やはり日本の経済を支えていただかないといけないので、わが国の経済を牽引する産業の集積化というようなことで整理させていただいております。

それから、ちょっと最後になりますけれども、藤原委員のほうから、都市と農山漁村の共生という話がございますので書かせていただきました。

13ページに行きますけれども、都市・農山漁村それぞれ、もちろん分離して成立するわけではございませんで、例えば農山漁村におきましたら、農山漁村で生産される食料や水等、あるいは自然、グリーン・ツーリズム等の対流の自然からの恩恵、あるいは国土保全ということを農山漁村がそういう役割を果たして、都市は、それによって助けられて成り立っていることがございます。

それから農山漁村におきましても、都市という市場があつて農林水産業が発展する。あるいは、農山漁村の多面的機能というの、都市の対流の中で新しい価値が創造されてるんじゃないかということでございますので、都市と農山漁村は相互の作用をし貢献することで国土が形成されているということを書かせていただいております。

逆に、そういうWin-Winの関係もあります。それからあと、都市と農山漁村それぞれがいろんな課題を人口減少あるいは高齢化の中で負っていきますので、そういうことも、それぞれバラバラに解決するのではなくて、お互いに田園回帰等の動きも踏まえながら相互に協力していけば、よりうまい解決の道筋が見える可能性もあると思ってるところでございますので、そういう意味での相互貢献も必要ではないかということでございます。

以上が第3節でございます。

あと第4節、ここも新しく付け加えさせていただきました。東京一極集中の是正と東京圏等の位置づけということで、地方創生と、それから国際競争力の強化、そこら辺をどういうふうに位置づけていくかというようなことを簡単に書かせていただいております。

1パラ目でございますが、地方から東京への人口の流出超過の継続というのは、地方の活力の喪失につながりますので、それは是正しないといけないということでございます。

それでは、東京一極滞留を解消し人の流れを変える必要があるということで、地方から東京に出てきた人が、また東京から地方に動くと、そういう対流を起こしていかないといけないんじゃないかということを書かせていただいております。そういう意味では、魅力のある地方の創生が必要であって、ローカルに輝く国土の形成を目指すということでございます。

それから2パラ目、一方、東京は日本を代表する国際都市でございまして、国際競争力を向上させ世界中の都市間競争に勝たないといけないということでございますので、グローバルに羽ばたく国土を目指すということも書かせていただいております。最後、個性ある地方の創生を図るとともに、活力ある大都市圏の整備を進める必要があるということで第3章につなげさせていただいております。

第3章は、前回の素案でお示しをした項目、ほとんど変わってございません。若干、前回の部会でご意見をいただきましたので、追加をさせていただいたところ、あるいは修正をさせていただいたところを、ご報告させていただきます。

ちょっと飛ばして16ページでございまして、増田部会長代理あるいは鷺谷委員からお話もございましたが、地方大学の活用のような話を、16ページ④の人の対流の推進の一番最後のポツで書かせていただいております。

それから18ページでございまして、柏木委員から廃熱等の未利用エネルギーの活用の話がございましたので、②安全・安心な大都市圏の形成の一番初めの安全で住みやすくなる括弧の中の4つ目のポツに、廃熱等都市に賦存する未利用エネルギーの有効活用とまちづくりの一体化ということで入れさせていただいております。

それから19ページに、垣内委員からナレッジ・イノベーション、ちょっと人材育成の話がございましたので、2つ目の括弧の、わが国が技術力で世界をリードしていくためという括弧の中の一番最後のポツに、ナレッジ・イノベーションにつながる人材育成というのを入れさせていただいております。

それから、②の1つ上の新しい成長産業の形成誘導というところでございます。ここは、先ほどの広域的配置ということで書かせていただきましたが、橋本委員からのご指摘で、配置を決めていくというよりも成長産業の形成を誘導していくのがこの役割でございまして、ちょっと表題は書かさせていただきました。

それから、20ページのスーパー・メガリージョンのところでありまして、下のほうの④リニア中央新幹線によるスーパー・メガリージョンの形成のところでございます。スーパー・メガリージョンの形成に向けた構想のところ、これポツがなかったんですけども、佐々木委員のご意見も踏まえまして、結節の強化による沿線地域の活性化とスーパー・メガリージョンの形成、スーパー・メガリージョンの形成に伴うビジネスチャンスの拡大ということで、このような内容を書かせていただき、ちょっと明示をさせていただきました。

それから21ページ、安全の部分で、第2節安定した社会を支える安全・安心な国土の(1)のところの①下から2つ目のポツですけれども、坂村委員から、災害時の国土計画

も必要じゃないかというお話がございましたので、事前復興計画の準備等災害発生後の応急、復旧対策の円滑な実施を可能にする国土づくりということで入れさせていただいてございます。

それからちょっと飛びますが、25ページでございます。

上のほうに、エネルギーインフラの充実という括弧がございますけれども、その2つ目のポツのところ、エネルギーの多様化、水素エネルギーの活用等、そういうことも視野に入れるべきだというお話が、佐々木委員からお話がございましたので、入れさせていただいてございます。

それから1ページめくっていただきまして、27ページでございます、人材育成それから共助社会づくりでございますが、その一番、第4節の上のところ、27ページです、出産・子育て環境の整備のところ、多様なライフスタイルや家族構成に対応した子育て環境の整備ということで田村委員からご指摘いただいたところを入れさせていただいてございます。すみません、ちょっと改行ができておりませんが、入れさせていただきました。

それから27ページ一番下のところICT技術の導入のところ、データベースを整備して地域生活の見える化を進めていく必要があるのではないかと高橋委員からのご指摘がございましたので、入れさせていただいてございます。

それから最後、28ページでございます。「はじめに」を入れた、一応「おわりに」というのを入れさせていただいてございます。今後の進め方のところでございますけれども、「おわりに」ということで新たに入れさせていただいてございまして、この中間整理を契機として、国民各層における活発な議論がなされ、新しい国土形成計画策定に向けて幅広い合意の形成が進むことを期待するというを書かせていただいています。

それを踏まえて、各方面の検討を踏まえつつ、中間とりまとめに向けた検討に計画部会としても取り組むということで、最後まとめさせていただいてございます。

以上、雑ぱくでございますが、修正した点を中心に、ご説明をさせていただきました。

それから、ちょっと今日、藤原委員欠席でございますので、紙で意見をいただいておりますので、ご紹介をさせていただきます。一番後ろに付いております「国土審議会計画部会中間整理（案）について（意見）」という紙でございます。第2章と第3章について、ご意見をいただいております。

まず、第2章についてでございますが、(1)のところは、これは、都市と農山漁村の相互貢献による共生というのを新しく書きましたので、感謝申し上げるということでございました。

それから(2)でございます。地域別の整備方法等で書いた中山間地域の中で、小さな拠点の形成が既存の集落を畳むことを意味するものではないということ、より明確にしろということです。言葉としては、「必要なネットワーク」を「基幹集落と既存の集落との間の必要なネットワーク」というふうに変えてほしいということでございます。

それから（３）は、第４節に東京一極集中の是正と東京圏の位置づけということで書きましたが、これをもっと前に書くべきではないかというご意見でございます。

それから、第３章についてのご意見でございます。

（１）は第２章の（２）と同じ意見でございまして、集落を畳むということの意味しないように記述をしろというご意見。

裏めくっていただきまして（２）でございまして、全国町村会のほうでおまとめになった提言の中で農村価値の創生というのがキーワードになっておりますので、それも第３章の中にそういうワードを入れてほしいということのご意見でございます。

それから（３）でございまして。これは土地利用の関係のご意見でございまして、①、②の２点について記述に加えられたいということでございまして。１つは、土地利用に関して別個の法体系でコントロールされていますので、将来的には法体系の一元化を図ることが重要な課題であるということでございます。２つ目は、土地利用の権限と責任というのは、住民に身近な市町村が負うべきものであるということを入れてほしいということでございます。

事務局からは以上でございます。

（奥野部会長） はい。ありがとうございます。

それでは、意見交換に入っていきますが。

これで、ちょっとすみません、本年、今回がこれ第６回になります。基本的な概念から出てきて、ここまでまとまってきたというふうな感じがいたしますが、これをベースにして形が見えてきますと、各広域地方圏では、これをベースにしながら広域地方計画の策定の議論が始まってまいります。

自治体の皆さんも、これをご覧になって議論を進められていくわけですが、そのことを想定したときに、こういった面についても再度議論してほしいなということを、３点ほど申し上げたいんですが。

１つは対流、それからコンパクト＋ネットワーク、これについては、皆さんそれぞれ共感をいただいているというふうに思いますけれども、先ほど来、前回も議論ありました、この中にも盛り込まれておりますけれども、いろんな状況、いろんな対流、いろんな地域、コンパクト＋ネットワークがあるもんだから、そういったものを我々頭に描きながら１つにまとめていくというふうなことを、やっぱり念頭に置かなきゃいけないと思う。それでわれわれが得心して、初めてこれをご覧になる人の理解ができていくんだろうというふうに思いますので、そういうことがまず１つ大事だと。

それから対流とコンパクト＋ネットワーク、これをどうつなげていくかということですね。これも横のつながりなんでございますが、これも我々、これからさらに、今年はまだこれで今回終わりでありましてけれども、来年も議論は続いていきますので、そういったことも、さらに議論していかなければならないな、と。

それから、もう１つ３番目は、国土軸との関係であります。各広域圏は、例えば日本海

国土軸ということがありますけれども、北から南まで全部の国土軸が1つで動くということとはございませんけれども、各圏域で、かなり長い軸での広域連携ということ想定しながら広域地方計画をお作りになっております。議論されていきます。

したがって、今まで国土軸という言葉が、ずっと国土計画の中に出てきておまして、ここでもちょっと議論に出たことがありますけれども、そういったこととの関係をさらにどうしていくのか、これも仕上げの段階では、この中で触れていかなきゃいけないものなんだろうというふうに思います。

現段階での整理を見て、ちょっと私の感想を3点ほど申し上げましたけれども、そういったようなことも触れていただきながら、ご意見をいただければと思います。

じゃあ家田委員、お願いします。

(家田委員) すみません。前回欠席いたしまして、だいぶ充実してきたなと思います。何分、中間整理なので、あんまり細かいことにこだわっても仕方がないと思うので、大局的なことではこういうことじゃないかとは思いますが、整理の仕方として、もうちょっと改善の余地もあるかもしれないということが申し上げるところであります。それは、今、部会長からお話のあった3点に少し関連していることになるんじゃないかと思ってございます。

些細なことも、それから些細じゃないような感じもすることも込みなんですけども、都合5点になります。どれも簡単です。

7ページのところで、表現上、違和感を覚えるのが、これは2つ目のパラグラフの2行目で、世界でも類を見ない多様性っていうんだけど、そんなことは全然なくて、世界に気候・風土でも文化でも言語でも、もっと多様なところは、いくらでもあるわけでね、これはどなたかのご発言かもしれないので、「世界でも類を見ない」は、ちょっといくら何でもなと思いますけどね。類は、いくらでもあると思います。

それから2番目、9ページ第2節の括弧の最初にコンパクトの話が出てくるんだけど、私が見るところ、初めて出てくるのがコンパクト、ここですね。だから、対流のほうについては、前のほうでそれなりの定義がされているんだけど、コンパクトなるものの定義が、ここで一応書いてあるんですね。地域の構造を見直し、行政や何とかかんとかかんとかかんとかの各種機能を一定の地域に集約化（コンパクト化）することによりって書いてあるから、ここで初めてコンパクトが出て、こういう意味だなんていうふうに書いてあるんだけど。

ここが重要なところで、このレポートでコンパクト化あるいはコンパクト性とか言いたいでしょけど、ちょっと、それは何のことを意味しているか、はっきり言う必要がある。

それは私が見るところ、空間的な密度を高めるということだと思うんですよ。その中身が、ここに書いてあるような種々のパブリックな機能のまとまりと同時に、もう1つ居住のまとまりってあるわけですね。特にコンパクトシティというのは、そこが非常に意識されているんだけど、ここには居住というのが出てこないんだよね。やっぱり定義として

手薄だなというような感じがしています。ぜひ、定義はきちんとしたい。

同時にまた用語も、何かコンパクトというのは形容詞で使っているつもりだと思うんだけど、コンパクトに書くときとコンパクトによりって書いてある何だか訳分かんない表現があったりしますので、日本語とは思えないような表現があったりする。これは気をつけたほうがいい。特にコンパクトが形容詞で、後ろのネットワークが名詞だっていうつながりで、あんまりうまくないなという感じはしています。

3点目、次10ページでありまして、私は、内容的にはコンパクト的にすることだと、ネットワークを強化することは大事なことだと思っているんですが、そこで極めて重要なのは、この10ページの上から4行目から6行目ぐらいのところ、要するに、何か役割分担のことだと思うんですよ。

ただ、この役割分担には幾つかの意味があるわけだね。ここに書いてあるような地域内だけでは必要なすべての機能を備えることは難しい場合には、非常にネガティブなっていうか、非常に苦しい状況での役割分担は書いてあるんですよ。つまりミニマム機能を、ある地域の中では、とてもじゃないけど確保しきれない。そういう場合に、近所とネットワーク的につながることによって、お互いに分担してやりましょうよって、これは1つの局面書いてあるけど。

もう1つは、そういうミニマムの機能だけ満足していればいいっていうもんじゃなくて、人間というのは、常に、より高度なサービスなり高度な暮らしなりを求めてきているわけですね。それを満たすのは前のほうにも書いてあるイノベーションのことだと思うんだけど、その高度な機能というのは、何もこういう水平連携的なものだけじゃなくて、垂直連携的な、よりでかい都市がより高度な機能を果たし、そことネットワーク的につながっていることによって小さいところも生きていけると、こういう階層ネットワークみたいなイメージがここで持たないと、片手落ちの感じがしています。これが3点目。

次4点目ですけれども、8ページですね。私は、このコンパクト+ネットワークという話と個性と対流というところをうまくクロスさせる必要があると思っていますので、ここで、さっき私の名前も言いながら書いてもらったんだけど、8ページの(2)の対流の発生うんぬんの6行目のところで、地域の1か所にコンパクトに集積することが、個性を鮮明にする場合もあり有用である、何か訳の分かんないことが書いてあるんだけど。

要するに何かっていうと、まとまるっていうことがキーワードだと思うんですね。ちっちゃいことがキーワードなんじゃなくて、まとまること。まとまることによって、そのエリアの中で何らかの訴えかけのある個性があれば、コヒーレンスが高まって、束になって、密度が高まって、強さが高まって、発信力が高まると、こういうことだと思うんですよ。

だけど、この表現だと、個性の持つパワーとかその発信力という感じしませんよね。1か所にコンパクトに集積することが、個性を鮮明にするということだよ。鮮明にすることとパワーを上げることは違うと。そういうロジックが、このところはちょっと弱いと思いました。

最後5点目です。私自身は、内容は納得しているんですけども、コンパクト+ネットワークという言葉が、ほんとにこれからもずっと行くのかという感じを持っています。

というのは、大臣がもう言い始めちゃったから、しょうがないんだっていう説明を事前に受けましたけど、そのくらいのことで、これからはしばらく続いていくキーワードをやっているのかという感じがするし。

あえて言わせていただければ、このコンパクトというのは、地域のまとまり感を強めるという、まとまりの強化ですね。それからネットワークというのは、つながりの強化ですよ。

だって、高齢化社会で、地方にいるおばあさんやなんかの説明するときに、コンパクト、コンパクトって、お化粧品でもするのかって言われちゃうよね。信じられないような用語の感覚であって。私だったら前のほうに、コンパクト+ネットワークと言ってもいいけども、それは、まとまりとつながりのことなんですよっていう言葉を入れますね、私なら。でも、僕がこれで責任をもらっちゃうんで。

それで、もう1つ言うと、さっきの対流のほうの話とまとまり、つながりの話を、どうクロスするかなんですけれども、僕はストラクチャーのところとアクティビティのところをクロスするような感じで生かす。ストラクチャーは作り立てですよ、地域やインフラの作り立て。それがまとまりとつながり、すなわちコンパクト性とネットワーク性の強化。つまり、地域がググググッと固まっていく、これは作り立てでしょ。そしてそれがつながってくという。つながって、それで今度、その上でアクティビティの活力が出てくる。それは今度、どっちかという動きのようなものですね。それが個性と対流。つまりもう1回言うと、まとまりとつながりが生み出していくところの個性と対流というのね。私はそう理解すると、この4つの用語が比較的に収まりがいいんじゃないかとは思っているんですけどね。まとめるときに、ご参考になればと思います。

以上、5点申し上げました。

(奥野部会長) はい。じゃあ、岡部委員、お願いします。

(岡部委員) 今、家田先生のお話を聞いていて、同じものを聞きながら、全然違うことを考えているなと思いました。小さいことを1つと、大きいことを1つ言わせていただきます。

1つは、さっきのネットワークに関して、家田先生は階層性を前提としたネットワーク構造というお話をされましたが、私は、このネットワークというのは相対として規模が小さくなっていても、ネットワークをすることによって、規模が関係ないネットワーク、つまり、大きい都市だから広域のネットワークをするというわけではなくて、小さなものでもグローバルにネットワークできるということがポイントだと思っているんですね。ですから、人口が減少しても、それで成り立つという、違った可能性が生まれるということがポイントだと思います。

そう思って見ますと、ネットワークの記述のところ階層性に即して書かれているわけ

ですね。

まず小さいほうからいきますと、11ページのまず中山間地域それから地方都市。地方都市では、近接する都市とネットワークというのが12ページの一番上にありまして、広域ブロックになりますと、地方都市とネットワークを形成し、より高次の都市機能を提供するというのと、そのあと最後に、アジアをはじめとする海外とのネットワークというのがあり、そして最後の大都市圏になって、より海外とのグローバルなネットワークということで、ネットワークも規模に応じてだんだん大きくなっていくというものだと思うんですが、私は、中山間地域であっても、グローバルにネットワークをするというのがあっていいんだと思う。また現実にならなわけですね。それがネットワークの強みだと思って。ツリー構造を前提としたネットワークではなくて、規模に無関係に小さいところと大きいところも対等につながれることがあるというのが、ネットワークのダイナミズムだっているように思っているの、その階層性はどうかかなっているのが、1つ疑問として、最初にお話を聞いた時から思っていました。

もう1つの点は、そもそも今回のこの計画の一番のポイントというのは、大西先生が2回目の時だったか、おっしゃったように、また1ページ目のところに、急激な人口減少と少子化のところに書かれているわけですがけれども、十数年間は人口減少は継続すると、そして十数年後に、うまくいけば出生率が2.07に回復するという、そういう将来にあって、どうすればいいかという構想を出すことなんですね。

ところが、この構想自体はこの具体的な状況に対して答えていなくて、単なる人口減少をどう乗り切るかというふうに第2章はなっていると思います。

そこで、ちょっと乱暴な整理をすると、十数年にわたり人口減少に対しての適用、アダプテーションとして、コンパクト+ネットワークというのがあって、そして国土政策としての緩和策で、出生率を2.07に数十年後には回復する、つまり、暮らしやすくて子供を生み育てやすいような空間構造を作るところが緩和策になるわけで、そこに対流があるんじゃないかというふうに私は今、例えば考えてみるということが出来るんじゃないかというふうに思います。

もう少し具体的に説明しますと、十数年間は人口が減少してくるんだけど、今の生活のクオリティを維持していくために、コンパクトとネットワークで何とかしのいで、そして、かつ、その構造の中にダイナミックな対流があることで活力が維持されて、規模はどんどんと縮小していく中でも、より子供を生んで育てていって新たな仕事を作り出していくとか、そういう環境を作るために対流というのを起こしていくというようなストーリーが考えられるんじゃないかと思います。

具体的にやっぱりお願いしたいのは、第2章において、この十数年にわたり人口減少が継続するにもかかわらず、大丈夫ですよとか、そういう書きっぷりって、できないのかなと思うんです。あるいは、こういう対流を起こすことによって、十数年後には、人口を定常的に維持するところまで出生率を回復するのに最も可能性の高い国土構造になっていま

すというような書き方をできないんだろうかというふうに書くのは難しいですか。

(家田委員) 書くのはできるけど、実際にできるか。

(岡部委員) そう宣言しないと、この計画の独自性というのは、そこにあるんじゃないかというふうには私は思ったんですけども、いかがでしょうか。

(奥野部会長) ありがとうございます。

続いて、じゃあ、ちょっと坂村委員、高橋委員の順番で、それから橋本委員の順番でお願いします。じゃあ、坂村委員、お願いします。

(坂村委員) はい。

どうやってこれをまとめていくかというところに、もう今来ているわけですね。

そうすると、やっぱり2つチェックしなきゃいけないことがあって、1つは論理的矛盾がないのか——論理的な構成のチェックですね。それともう1つは、分かりやすさですね。

多分ここにずっと出席されている方とか——私もかなり出席しましたが、そうだとするとこれを読んでいても何かじわーっと分かってくるということもあるんですね。逆に言うと、初めて読んだときに果たして分かるのかという問題に関しては、やっぱりもうちょっと精査したほうがいいかなという感じがあります。簡単に言うと、分かりがあんまりよくないかなと思うところがあります。

一体どこの分かりが悪いのか具体的に言うと、やはりコンパクト+ネットワークのところですね。

我が国の国土に関して、いろいろ問題があると。それで解決する決定打がコンパクト+ネットワークだという事に、みんなが納得するようになると非常にいいのですが……。問題があるのは確かに分かるけど、その次の決定打となるはずのコンパクト+ネットワークというのが、具体的にどういうことかというところが曖昧な感じですね。9ページ辺りの多分この第2節辺りで、「ネットワーク」という言葉が曖昧というか、色んな意味で多義的に使っているために曖昧な感じになっている。どこでその定義が出てくるのかなと見ると、何となくじわーっと出てくるんですね。最初の場所が7ページ目辺りに何となく出始めて、それで何か知らない間にネットワークとコンパクトに括弧がついて、それが9ページですね。それで何か定義は終わりという感じになっています。

重要な節なので、もうちょっと分かりやすく書いたほうがいいのではないかなと思うのは、例えば10ページの下から2個目のパラグラフのところは、何回読んでもやっぱり読点が多くて、1個の巨大なすごく長い文章になっていて、ネットワークによって一定の圏域人口を確保する、何かネットワークというのは圏域に人口を確保するため、コンパクトになっていったところを結ぶため、人口を確保することが重要とか、何となくだんだん分からなくなってきたという感じになる。このあたり、もう少し整理したほうがいいと思います。

特にネットワークに関しては、ICTのことは重要だということは書いてあるんですけど、ここも、もうちょっと書き方があるのではないかと思います。やっぱりじわっと何か

ぼやっと書いてあるという印象です。普通の人が思う今のICTというのは——スマホをみんなが持っているよねとか、インターネットってみんながやっているよね、とかだと思えますが、インターネットもスマホという言葉もどこでも出てこないですよ。

現代社会は、既にネットワーク社会に入っているんです。ネット社会ですね。そういうことと、ここで言っている「ネットワーク」というのは多分ちょっと違うのですが、今「ネット」と言ったら、みんなの頭の中で思い浮かべるのは「コンピュータネットワーク」の方でしょう。例えばSNSソーシャル・ネットワーク・システムとかそういうもので、みんながつながっていると思うでしょう。なので、ここではこういう意味ですよとか——そういうところを少し丁寧に、もうちょっと何か書いたほうがいいかなと思います。

ここで議論していることは、本書の中にほぼ出ていると思います。重要なことがほぼ全部。国土形成でどうしたらいいかということについても、いろいろな話題が出ています。だからこそ、よく頑張っているとも思うのですが、もう少し何とか伝え方で気をつけたら、さらに良くなると思いました。

以上です。

(奥野部会長) ありがとうございます。

じゃあ、高橋委員お願いします。じゃあ、高橋委員、橋本委員、望月委員、野城委員の順番でいいですか。はい。

(高橋委員) 私は、コンパクトにちょっと関わったお話をさせていただきたいなと思います。

この報告書の構成からすると、前のほうに問題があって、特に人口減少型にどう対応するかということで対策が書いてあるという書き方をしていると思うんですけども、何故か腑に落ちないというか、そろばんが合わないなという感じが、とてもするわけなんですね。

読み方を変えてみて、問題で人口減少型社会ということとあって、実は後ろのほうの計画を人口増加型、例えばイランのような国の、プランとしては、ものすごくよくできると。人口が減るにもかかわらず拡大で、それで人が減るにもかかわらず、寄せてネットワークでそこを全部残すという書き方をしているんだけど、ありえない。だから、腑に落ちないんじゃないかなと思うんです。

私最近、これから先、日本の国土じゃなくて医療福祉をどうもたせるかという話をいろんなところで提言させてもらっているんですけども、1.5倍高齢者が増えるから、1人の医療福祉の量を3分の2に減らそうと、質も落とさずにと。どうすればいいかと。食べられなくなったら、あきらめるという不幸的な価値観に、日本の死に方を変えるべきだって話を各地でやって、反論が随分あるんです。

それはなぜかという、もうそれしかないなってふうになるので、しかも死に方を切り替えるっていうのは、決して個人にとって不幸せじゃないと。それができると、そろばんが合いますよという話をしているということなんです。

ここでコンパクトという話に持ってくると何が大事かという、住み慣れた場所に住み

続けるということをもうあきらめないといけない。それがないから論理矛盾しているんじゃないかなというふうに思うんですね。

それは2つあります。

1つは東京からの移住。2年前から私もこれ言い続けて、どこがいいですというお勧めの場所を全部地図で示して、いろんなところで話をしているんですけども、早いかなと思ってたら、今年の8月、まち・ひと・しごと創生会議の準備室を立ち上げる時の安倍首相の記者会見の時に、東京からの移住という言葉がポンポン出てきて、あ、ついに時代が来たなど。だから、東京から外に出ましょと、東京に住み続けるという必要はないんじゃないかという話。

それからもう1つは、先ほど藤原さんからの資料で、すべての村を守るというような提言があったけど、私はそれを、これは大矛盾だと思うので。むしろ進んで動こうと、積極的に、そういうふうな意識が変わるということがないと、このコンパクトというイメージははっきりしてこないんじゃないかと。

だから、基本的にどこに寄せるかという、東京から出して、それからある程度の場所はむしろ提示しているというような形にして、中核都市に寄せるというようなメッセージがあると、この話が成り立つと思うんですけど、そこを前提としないと、最初申し上げたように、人口減少型の国土を作るという話じゃなくて、むしろ人口増加型の社会の何か模範のような感じがすると。

だから、そこら辺のそろばんを合わすためには、今回の話で言うと、リミテッドプレイスという考え方の訣別ということをする必要があるんじゃないかというようなメッセージがないと、ここの全体のそろばんというか、つじつまが合わないんじゃないかなというふうに思います。

これはとっても書きにくいことだということは重々、認識しながら話をしているんですけど、それが、わが国の国土、人口減少型社会で最も大切な価値観の見解の1つではないかなというふうに思います。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それでは橋本委員、お願いいたします。

(橋本委員) 国土形成とイノベーション、あるいは対流の維持ということで少し申し上げて、あとは若干、各論で併せて申し上げたいと思います。

ご案内のとおり、アベノミクスの効果を実体経済にどう及ぼしていくかということが今後問われる中で、イノベーションが進んで投資も拡大をしていくということが期待されているわけです。

今後のイノベーションというのは、言うまでもなく、成熟社会の知識集約化とかサービス化とか、あるいは課題解決の産業化といったようなことにかかわるものですし、産業ごとが多角化して、いわゆる新しい成長モデルを実現していくという意味合いが強いと思います。

このために、これを支える国土構造の画一的、集中的なものよりも、地域の多様性を尊重して連携させていくような構造に転換していく必要があるということなんではないかと思えます。

新しいイノベーションのために対流というのは必要だという、その辺の意味合いとか論理というのが、さらに明確になっていけば、メッセージとしては分かりやすいものになるかなというふうに思えます。

ただ一方で、やはりそういう知識集約的なイノベーションというのは、自然体でいけば大都市圏に集中する傾向がありまして、大都市集中の背後にあるのは、やはりそれだというふうに思えます。

それで言うと、今後日本の経済の再興をイノベーションを梃子に本格化していけば、これと地方創生というのは、ほんとに両立させていけるのかと、どういう形でそれを成り立たせるのかということが、さらに厳しくなってくる部分もあるんじゃないかと思ってまして、地方創生の問題の本質というのは、そこにあるのかなというふうに思っています。

ただ、あんまり解がなく、地方の独自のやはりイノベーションモデルというのも今後生み出していくしかない。地方サイドのやはり構想力とかクリエイティビティをどう高めるかということが最重要な課題になると思っていて、地方の経営資源を外の力と結び合いながら新しい価値を生み出していくような仕掛けという部分で知恵出しをいろんな形で一体にやっていくということが必要だろうと思えます。

あと、ちょっと各論で申し訳ありません、あまり長くならないように申し上げます、最後の27ページの横断的視点というのは重要なことを指摘しているのかなというふうに思っております。

1つは技術革新の導入ということですが、アメリカの経済再生を見ても、最初はIT産業が牽引して、そのあとはIT利用産業がリードしたという経緯から見ますと、日本の場合は、やはり後者が遅れている。やはりICTの利用というのは、今後は非常に必要になると思うんです。

特に、なぜ日本で、そういうのが十分進まないかといいますと、これは技術の問題というよりは、むしろ技術革新と社会課題の解決をうまく結びつけて具体的なビジネスモデルの確立までつなげる経営技術の革新というのが、なかなか伴っていないと、よく言われることでありますけれども、そういう部分があるのかと思えます。

日本らしいオープンイノベーションの創造とか、むしろ企業の経営組織とか雇用の問題とか、そういう部分を併せて、この部分はセットで議論していかないと、なかなか実現できないのかなと思えます。

最後にもう1つ、民間活力の活用、28ページのところです。これも非常に重要な点だと思います。財政難を考えると、インフラや公共施設の整備、民間活力の活用が必要だということなんですが、PFIだけ見ても、やはり過去の実績で400件4兆円の水準にとどまって、やはりこれまで十分それが進んでこないのがあったという現実もあると思っていま

す。

これはなぜかという、やはり今後のPPP、PFIは、単なる施設建設よりも運営のノウハウあるいは融合的なマネージとか、あるいは需要リスクを伴うと、非常に複雑化してきてしまうということなので、やはり今後、公民の関係者がうまく連携して、インフラや公共施設にかかわる経営ノウハウをどう高度化させるかというところで工夫をしていかないと、絵に描いたもちになるのではないかというふうに思っています。

公民のそういうノウハウをうまく融合させるために、早い段階から公民の事業アイデアと一緒に協議して出し合うようなプラットフォームを作っていくとか、新しい公民が連携しての事業体を作っていくというような、ちょっと今までにないようなアプローチを、ここでは果たしていく必要があるのではないかというふうに考えているところです。

あと最後に1点だけ申し上げます。

地域における金融機能の高度化という点で、今後の国土形成の中で、産業のイノベーションとか民間の活力という重要性が高まるというのは、これは一貫したメッセージだとしますと、私も関わるから申し上げるわけでもないんですが、やはり金融の役割というのは、これまで以上に非常に重要で、融資だけでなく投資にも使っていくとか、ナレッジのコーディネート機能をうまく発揮していく、金融機関が相互連携してと。そういう金融の機能を、さらに国土づくりにこれまで以上使っていくという視点は、非常に重要だと思っております。それぞれいろいろリスクマネーの提供とか産学官金連携とか、いろいろ各論で散りばめていただいていますけれども、それを貫く視点として、そういった点もあるのかなというふうに思いますので、最後に、一言申し上げます。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それじゃあ、望月委員お願いいたします。

(望月委員) 実は言うのをためらっていたのですが、高橋さんが言おうと思っていたことをズバリと言ってきて、ちょっと強気になって言います。

コンパクト化の話の中で、特にここで問題になるのは10ページの上のほうにある、地域がネットワークで結ばれることにより、すべての地域で必要な機能を楽しむことができるというところです。「すべての地域」という、ここまでの強気の発言をする時に、各種機能の集約化というふんわりした表現でいいんだろうかというのは、私も思ったところです。

藤原さんは問題があると言われるかもしれませんが、集約化というのは、やっぱり移り住むとか、まとまって住むということで、一方で捨てなきゃいけないものとか畳まなきゃいけないものというのは、人口減少のなか、どうしても出てくることです。そういう覚悟があってコンパクト化することによって、すべての地域という言い方ができると思うんですよ。

ですから、痛いことは言わなきゃいけないし、それは突きつけられた覚悟なんだというところは、言いきっていないと説得力ないんじゃないかなというのが、一番感じたことです。

それから空間的に、特に家田先生もおっしゃられたんですけど、住むということは、バラバラにだだっ広いところに住んでいたら、それは住むということではないような気がするんですね。いくらネットワークで物流も何もつながったから生活できるじゃないかって言っても、人間の最低の生活っていうか社会生活を考えると、やっぱりある一種の固まり、近隣関係、コミュニティというのは、どんなちっちゃい単位でもあると思うんですよ。

そこは維持していくためには、ある種の覚悟が一方で必要ですよということを、宣言しなくちゃいけないんじゃないかなということを強く感じました。

あとちょっと1点。前回の議論での大都市圏の役割とかネットワークとか対流の位置づけの話は、今回は少し整理されていて、特に東京論を特出ししたということは意義があったと思います。

その意味というのは、一番集中を是正しなくてはいけないということ第4節で打ち出したことで、はっきりとした姿勢が示された感じがしたので、そこはよかったんじゃないかと思いました。

ただ、その中で、この間もちょっと議論があったんですけど、もう少し突っ込んでいけるとすれば、東京が持っているリスクが、もっと強い形で出していくことによって一極集中を是正する。ネガティブな部分ですけども、それを梃子にして分散をさせていく、地方との連携を強めていくというような、ちょっと逆説的なやり方もあるのかなと思いました。(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それでは野城委員、お願いします。それから、じゃあ、鷺谷委員、すみません。

(野城委員) コンパクト・ネットワークについてお話しします。

先ほど家田先生が、コンパクトがまとまりでネットワークがつながりと言ったほうがいいんじゃないかとおっしゃいましたけど、私もそうだなと思います。

それで、イノベーションという観点で申し上げたいんですけども、今、知識経済、知識の付加価値を作っていく、そこにイノベーションを持って行くというような観点から考えますと、地理的な近接性は非常に大きな意味を持っていて、やはり、ある例えば農業でイノベーションが起きるとしても、それは農業という、そこに生産の現場があって、そこに行かないと分からない知識があって、その周りにいろいろな業者と結びついていけば、新しい大変おいしいものができるとか、あるいは世界的にも競争力のあるような農作物ができるというわけでありまして、やはり地域的な近接性というのは大変大事で、いくらネットワーク社会になったからといっても移転できない知識はある。

これは、かつてのものづくりの拠点だったところについても、そこにある製造装置も大事ですけども、発想を変えて、そこにある集まっている人材が持っているものづくり知識ということが、実はこれから地域をおこしていく地盤であり、そこにどれだけの密度の異なる能力と知識が集約できるかという意味でのつながりを作ることができるか、それがコンパクトだと思うんですね。

ただし、そこで、そういう地理的近接性の中で新しいものを、ある意味で大きさに言え

ば、世界で唯一の集積を作るということが、1つのコンパクトの意味合いだと思うんですけども、もし、そのコンパクトなノード、まとまりの中でも、全くない異質なものがあるとすれば、それは距離的な、たとえそれが遠距離であろうが、結びつきはあると思います。つまり、コンパクト・ネットワークというのは、まずノードである部分には、もう世界にないようなある個性、集積ができ上がっていく、しかし、それがもし大きくなっていくとすると、今度は仮に距離が地球の裏側だろうが何だろうが関係なく結びつき合うようなネットワークができ上がるわけでありまして、それがイノベーションという観点から見た場合のコンパクトとネットワークだと思うんですね。

逆に言うと、コンパクトにするだけで何もそこに付加価値がつかないければ、パートナーが、組んでこういう新しいことをやろうというお声がけをいただけないと思うんですね。

だからやはり、それは集積を作って、ある価値を作り上げる力があるからこそ、逆に自分たちもネットワークの相手を求めて、特に岡部さんがおっしゃったように、その分野が小さかろうが大きかろうが関係なく、そこにある価値を作れば、別に東京とかなんかを気にせずに、ある地方が勝手に、ある国のあるところと一緒にネットワークを組んでいけばいいんですけども、ただ、そういう価値がなければ、どこからお座敷がかかってこないということになりますので、そういう意味では、近距離的な特性の地理的な近接性を表したまとまりと、しかし、それを作られたほうの価値があるからこそ、距離とか、遠距離だろうが結びついていく可能性という意味でのコンパクト・ネットワークという言い方は、これはそれだけで何か、今ここで書いてあることが説明できませんけど、おそらくそれは、そういうような意味合いでコンパクトとネットワークを説明されたのかなというように思います。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それでは鷺谷委員、お願いいたします。

(鷺谷委員) 論点整理から具体的な記述案のフェーズになってきましたので、ちょっと気がついた点に関してですが。

前の計画との関連にかかわるような記述はなくてもよいのでしょうかということなんです。前の計画に沿った成果で、もしかしたら画期的なことがあって、今度の計画で、それを取り入れて一層発展させること、それから、その方向性とか、前の計画では十分に論じられていなかったけれども、本計画でハイライトされるべきことなどが記述されていると、着実に何か計画というのが積み重ねられていくという印象を与えるのではないかと思います。はじめにもしくは第1章辺りに、前の計画に沿った進展の現状を分析・評価するところがあるところも若干あってもいいのではないかと思います。1点です。

それから、もう1つの関係性について気になるのは、広域地方計画との関係ですけれども、形成計画と広域地方計画の関係も、ここで重視するキーワードの交流にふさわしい活発な相互作用みたいなものを感じさせるような記述があるといいのではないかと思いますので、広域地方計画に沿った実践や地方での政策などの現状を分析評価して、

それにかかわりのあるところに少し入れていくということも考えられるのではないかと思います。

私は専門から、ちょっと一部しか存じ上げておりませんが、例えば関東地方でも、広域計画における自然環境に関する計画の実践では、とても高く評価できる動きも認められるんですね。

兵庫県の豊岡市で野生に戻されたコウノトリが、順調に第2の成長をさせていて、野生のコウノトリが日本各地に飛来するようになってきて、コウノトリをシンボルにして自然環境にかかわる、あるいは一次生産にかかわる地域づくりをしようとしているところでは、生殖環境の整備とか環境保全型の農業の取り組みを強化するなど、いろんな新しい動きが、生物多様性の保全と自然再生という意味では新時代を予感させるような動きもあるんですけども。

東京に至近の千葉県の野田市は、そういう地域づくりの先頭に立っているだけでなく、コウノトリ、トキが舞う関東自治体フォーラムを組織するなどして、関東地方をやや広域を視野に入れた自治体の自然再生ネットワーク形成活動を牽引しているんですが、それは、前のおそらく広域計画に記されていることを具体化するような動きなのではないかと思えます。

現在は、そういう前の計画や地方の動き、計画にかかわる動きがあまり述べられていないので、どちらかといえば、天下り的に命題が述べられるような構成になっていて、ちょっと形而上学的な議論展開をしている文章があるんですけども、そういう記述を加えることによって、より生き生きした交流というキーワードにふさわしいものになるのではないかというふうに感じました。

以上です。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それでは田村委員、それから垣内委員。田村委員、お願いします。

(田村委員) まず計画の目的なんですけれども、対流というほうを目的に持ってきてはいかがでしょうか。国土を取り巻く潮流と課題により、膠着化する国土社会に対流を醸成することが計画の目的であるというふうに、まず対流を目的というふうに持ってきて、そのためにコンパクト・ネットワーク、私的にはグローバルというのを3つ挙げてはいかがかなと思います。いろんな方のご意見も参考にしながら、1番はコンパクトというふうにして、まとまることによる拠点強化というふうにしたいです。

防災上はコンパクト化することは悪いことではないというのは、何度も申し上げてるんですが、それが拠点として強化されなければ結節点にはなり得ませんので、コンパクト、集約だけすると、そこで何も生まれないような印象を与えるので、やはりコンパクト、まとまることによる拠点強化と、是非していただきたいことと。

じゃあ次、2番目はネットワークってキャッチフレーズを立ち上げていただいて、つながることによる機能強化というふうに、キャッチフレーズを是非していただきたい。

3番目なんですけれども、ちょっとこれはチャレンジングに、グローバルってしていただいて、グローバルは世界だけではなくて、グローバル、圏域を超える展開による成長の強化というふうにしていただけないかなと。

グローバルというのは、例えば中山間地域にとってみれば、地方都市や大都市と、それから直接世界とつながっている実は中山間地域もあるんですけど、そういう圏域を超えること自体が、もうグローバルなんだと、チャレンジングなんだということで、その3つを挙げてみてはどうかというふうに思います。

そうやって、圏域を超える展開ということになると、ちょっと圏域のところの整理が不十分かなというふうに思う。11ページの第3節なんですけれども、まずここに中山間地域って、多分これはどちらかという行政名であって、あとには実は農山漁村というような言い方で出てきます。

なので、私は圏域として一番小さなというか、いわゆる田舎イメージの単位を農山漁村圏というふうにして1つで、括弧中山間地域でもいいと思うんですけど書いていただいて、2番目は地方都市圏というふうに。これは、地域やら地方都市やらっていう何か大きさが全然、ポイントだったりまとまりだったり、よく分からない。1番は農山漁村圏（中山間地域を含む）、2、地方都市圏、3番は大都市圏というふうにしていただいて、それで4番を、複数の圏域を含む広域ブロック、ここはもう呼び名だと思いますので、圏はつけられないかなと思うので広域ブロック。じゃあ、あとメガリージョンとかはどうするのかというと、5番は新しい圏域、「メガリージョン」みたいな括弧と。それから6番目が世界との圏域というのをぜひ入れていただいて、構築ということで、ここにグローバリゼーションを入れていただいて、もちろんグローバリゼーションを特出しするのであれば、あとに書いていただいてもいいんですけど、段階的に整理をしていただいて、1番から6番までどこを超えようと、全部グローバリゼーションというふうに言いたいな。せめて圏域を超える展開というふうに言いたいなというふうに思うところです。

というところで行って、次はコンパクトということの中身なんですけど、先ほど家田先生がおっしゃった空間的密度を増すというようなお言葉はすごくいいので、それがまず1つコンパクトの内容だろうなというふうに思います。

ただ、この中には、実はサービス機能の集約しか書いてなくて、それは不公平だろうと思います。

なので、空間的密度を増す、1、2番目サービス機能の集約、3番目は、やっぱり集中的な社会基盤整備と保全というふうに、ここのインフラのところはやっぱり集中的ということを書いていただきたいということ。

それから実は機能は、もう1個4番目を加えたいんですけど、もう1個は、実は昨日、もう東北のほうで1回目の会議が開かれて、その中で皆さんおっしゃっていたのは、コンパクトって聞かされると、やっぱり裾野は見捨てられるのかっておっしゃったんですね。やっぱりそう言うよねと思って。

なのでせめて、だけど、皆さんがおっしゃっているように、やっぱりコンパクトにしていかなきゃいけないのは事実だと思うので、4番目として、これまでの発展過程による歴史的・文化的背景の尊重ぐらいを何とか入れていただけないかな、今思いつく最善の策はそれなんです、入れていただくとよいのかなというふうに思うところです。

というのが、皆さんのお話を聞いていて、まとめた私の意見というところでございます。(奥野部会長) ありがとうございます。

じゃあ垣内委員、お願いいたします。

(垣内委員) 今までこの議論に参加させていただきまして、基本的に、今回の資料の中にこれまでの論点、それから今議論すべき点というのは、ほぼ網羅されていると私は思いました。

ただ、幾つか非常にいいキーワードや、フレーズが、あまりまとまらずに、幾つかのところどころ出てくるというのが、ちょっと残念な点だと思います。

例えば5ページのところで、国土空間の変化というところに、人口減少が開発圧力の低下等を通じて様々な余裕をもたらすとかいうようなことが書かれていて、人口減少を好機ととらえた整備が必要だと、これも非常に重要なフレーズだと思いますし、7ページの国民1人1人が豊かさを享受できるように、というようにも非常に重要だと思いますし、そのあとのほうに、インフラ整備のところに選択と集中というのが書かれておりました。

こういうのをつなげて読むと、この報告書が目指したいランディングポイントというのが非常にはっきり見えてくると思うんですけど、それが分散して出てくるために、少しこの報告書の立ち位置が明確化してないという部分があるのかなという感じがいたしました。

基本的に、人口減少という非常に大きな変化をうまく乗り越えてソフトランディングしていくために、コンパクト&ネットワークを立ち上げるという。その最終的な目的は、それぞれの国民の豊かさというものを享受する。その豊かさというのは、これまでの経済を中心とする豊かさだけではない。だから、国のこれまでの枠組み、ある意味、垂直統合的な大都市があって、それから地方都市があって農山漁村があって、それは垂直的に統合していくという形から、むしろ水平連携、この報告書案に記載されているネットワークというのは多分水平連携だと思うんですけども、小さい都市同士も連携する、あるいはグローバルな展開の中で、日本の地方都市と、海外の地方都市も連携すると、そういうようなことも、多分はっきりとここに打ち出せるのではないかと思います。

こういったメッセージが、まとまりを持って書かれていないために、いまひとつ伝わり方がはっきりしてないのかなという感じもしますので、それを少し寄せて集めてメリハリをつけるということが必要かなと思います。

2つ目は、コンパクト化の本来の目的は集約化ですから、当然クラスターを作っていくって競争力を上げるということなので、そういう観点から見ると、やっぱり東京の位置づけというのは非常に微妙なところでして、東京ほど、コンパクト化していて世界とネットワ

ークがあるところはないと思うんですけども、コンパクト&ネットワークを進めると言いながら、東京が一極集中は是正していくというところが、一読しただけでは非常に分かりにくいと思います。

ここで提案ですが、他の先生方もおっしゃったことですが、ネットワークには、競争力を上げるということだけではなくリスク軽減ということも当然あると思います、バックアップ機能とかですね。

だから、ネットワークの説明のところ、そういうものも書き込むと、東京のコンパクト化というものについても、リスクマネジメント等の観点から、是正する、というストーリーになると思います。このコンパクト&ネットワークを進める中での一極集中について、説得力が増すのではないかと、というふうに思いました。

それからあと最後に、ちょっと細かい部分ですけども、8ページの一番最初に、都市と地方の対流とあるんですけども、そのあとは地方都市間の対流というふうになっていまして、また、都市と農村漁村といった言葉も出てきますが、この構図がちょっと分かりにくい。地方というのは何なのか、農山漁村なのか、それとも、ほかのものなのか。都市というのは大都市のことなのか、あるいは、もうちょっと違う都市なのか。ちょっとここら辺の、ここはちょっと言葉の整理が必要かなというふうに思いました。

コンパクト&ネットワークについては、この報告で言うコンパクト&ネットワークの意味するところをきちっと説明すれば、このまま使っているんじゃないかなというふうに思います。

家田先生の提案も大変魅力的なんですけれども、既存の言葉ですべてを包含するって難しい部分もあるかなというふうに思いましたので、ちょっと、これは感想です。

以上です。

(奥野部会長) ありがとうございます。

それでは佐々木委員、それから矢ヶ崎委員の順番で。佐々木委員、お願いします。

(佐々木委員) どうもありがとうございました。

全体的には、私が申し上げた意見をたくさん取り上げていただきまして、しっかり書き込んでいただきまして、本当にありがとうございます。

2つの観点でちょっと意見を言わせていただきたいと思います。

1つは東京一極集中と、東京都が日本代表として国際都市としての競争力をしっかり強化しなきゃいけない。この2つの課題は、ある部分では多分背反が起きるんだろうなと思います。

しかし、二者選択での議論は前向きではないので、東京一極集中によって、どんな問題が起きているのか具体的な解決策を考えていく中で出てきたものが、実は、国際都市としての競争力アップの方策と背反してるのか、それともそうじゃないのかっていうことを、きちっと詰めていく必要があるのかなというふうに感じてます。

例えば災害に対する強靱化みたいなことを、ソフト・ハードで東京都でやるということ

自体が、これは東京都一極集中の弊害を緩和する策でもあるし国際的に競争力をアピールする重要なポイントでもあるので、何もこれは背反しないわけでありませぬけれども。

一方で、機能が東京にたくさん集中しているということで、人がいっぱい集まると。結果的に人口密度がだいぶ高くなったり、そういうことで住環境が少し劣るとか住民サービスの点も悪いとか、東京に帰ってくるために交通渋滞、それから長い時間、通勤列車で揺られて来るというようなこういうようなことは、実は東京の競争力を高めるがゆえに、いろんな機能を集中させているということと、やっぱり背反になってくると思うんですね。そうすると、何とかこれをイノベーションで解決しなければいけません。

事例としては、ITの進化ですとか役所や企業の働き方の改革で在宅勤務ですとか、それからオフィスの分散化、こういうものが可能になれば、それは大幅に改善されて両立してきます。

そういういろんな働き方の大幅な改革が在ると思ひますけれども、そういうことが起きてくれば、東京周辺で、必ずしも真ん中に来なくてもいいわけですから、周辺ですべての生活それから仕事ができるということで、クオリティ・オブ・ライフが大変向上するのではないかなと思ひます。

さらに高規格道路を使つていて、トラック物流なんかも自動化すると。こういうことをやつて物流コストの大幅低減があれば、どうしても物流コストの関係で、大都市地区に在らなければいけない、こういう企業がどんどん地方に出て行けると。

こうなると、非常に地方活性化という観点からも大いに助かるわけでありませぬし、何もこれで東京の国際競争力がそがれるわけではなくて、むしろもっとも高度な首都機能を強化する余地が出てくるというふうに思ひます。

これは、私の頭の中で考へても大したアイデアが出てきませぬので、ぜひ、こういうようなことを研究する機会をどこかで作つていただければ、それから、いろんな見識を持たれた方の知恵を集められればと思ひます。これが東京の話です。

もう1つが、対流という言葉がキーワードになつて在ります。産業界から言つて、対流というのは、どうしても物流とか人の移動というふうに頭が行きます。ぜひこれは、しっかり取り組んでいただきたいと思ひます。人の移動、物の移動がスムーズかつ低コストで行われるということが、非常に大事だろうというふうに思ひます。

道路、港湾、鉄道、空港といった既存のインフラの結節点、これはもうしっかり書いていただきまして、ありがとうございます。

加えて、やっぱり国際的に遜色のない物流コストの実現のためのインフラ整備。例えば先ほど申し上げた高規格道路で、トラックが自動運転で走つていけるようなレーンを造つていただくとか、それはもちろん普通の車も入つていいわけでありませぬけれども、そういうことを整備していただくというようなこととか、日本海側と太平洋側の両方を有効に使うという点では、まだまだ日本海側のほうでのインフラ整備が必要ではないかというふうに思ひます。ぜひ、考へていただきたい。

それからコンパクトについてです。国土のコンパクトという話の中で、先ほど来、住む人にとってのコンパクト化ってということになると、やっぱりどこかの場所にみんな集まってきたって住むということが、人口減の中では妥当なことだろうと思うんですけども、1つ産業界から見ますと、国土は重要なアセットであります。それで、いったん開発をしちゃった国土というのは、放棄をすると荒廃するんですね。元に戻すには、ものすごい労力がかかるわけでありまして、そんなことは、多分できないと思うんですね。そうすると、人が住まなくても、そこに人が行って国土を保全する、つまり林業をやるとか農業をやるとか、何かそういうことで手を入れていくという必要があるんです。

そうすると、そういうところへのアクセサビリティを確保する必要があります。中山間地域での半自動運転みたいなことで、お年を取った方でも、行って山仕事ができるというようなことの自由度の、移動の自由度の確保ということも1つは考えてもらいたい。

コンパクト化が、ある部分の国土の荒廃に結びつくというのは、国土の強靱化の点からいっても大変大きな問題になると思うんです。ぜひ、住むということと、それから国土保全ということのバランスで、ここは議論を進めていただきたいということをお願いをし、話を終わります。

ありがとうございました。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それでは矢ヶ崎委員、お願いいたします。

(矢ヶ崎委員) すみません。発言の機会をいただきまして、ありがとうございました。前回ちょっと欠席してしまったので、議論に追いつくのに一生懸命だったんですけども。

私は観光のほうに専門なので、観光というものを今回、この形成計画の中に取り上げてくださったということで、意義を大変感じている次第ですが。

コンパクト、ネットワーク、対流というこのキーワードの中で観光を読み解くということになりますと、なかなか難しいなということも感じております。

例えば15ページの第3章のところになりますが、第3章第1節個性ある地方の創生の中の③魅力ある「しごと」の創出の中の地方における産業の振興の中の地域の成長産業としての観光の振興というタイトルになっておりますけれども、成長産業ということになると、観光だとインバウンドかなということが、まず最初に頭に浮かびます。国内旅行は成長産業というか、そんなに伸びてはおりませんので、訪日外国人を取りにかかるといことなのかなというふうに見ますと、その下に整理されている言葉が、ちょっとそぐわないところがありまして。

こういったことに象徴されますように、今、観光行政として一生懸命おやりになっていらっしゃる以上は、ちょっと観光のパートについては記載がされていないんじゃないかな。もう少しコンパクト、ネットワーク、対流という将来のビジョンとしてのこのキーワードの中で、観光というものがどういうふうな位置づけを果たしていくのかなということを読み解いた上で、もう一歩進んだ箇条書きがいただけたら、とてもありがたい

など思う気持ちでいっぱいあります。

例えば、成長産業という言葉を使うのであれば、箇条書きの中身はインバウンドということになると思いますけれども、もうちょっと視点を変えまして、先ほど来、先生方の話ありました、コンパクトでまとまりをするという事は、過渡期においても最終的にも、少し残される地域がどうしても出てくるな。その地域のことをどうおもんばかるのか、どう考えていくのかということも考えなきゃいけないですよ。まとまっていくことが、集約化が大事だというふうになるのであれば、なおさら、その対比として考えなければいけないというときには、そういったまとまり以外の地域というのが当面、何とか観光という部分で食いつないでいくのかな、人々の注目を集めていくのかなということも考えられるというふうに思いますし。

そもそもこの記述が「しごと」の創出というところに入ってございますけれども、仕事ということであれば、この幾つもある箇条書きの中身が需要の創造、需要の部分とそれを受ける経営、この力を上げていって、そして観光は正規の雇用以外の多様な働き方を創出いたしますので、ほかの産業体にはない少し緩めの働き方も含めた上で、多様な雇用を創出できる観光というものについても言及がいただくと、観光のうまみっていうんですかね、国土交通省的にというか、国土形成的に観光を使うということのうまみっていうか色彩っていうんですか、どうもすみません、そういうようなところが、もうちょっと表現されてくるといいなと思います。

実際、観光の分野では、シーズンナリティがございますので、非常にシーズンオンのときにはインストラクターとかでプロの生活をしながら、オフのときには別の仕事をしたり、勉強に行ったり、地域貢献したり、いろいろな、生きがいと非常に近い形の多様な雇用というものを創出していくことができる。そのための需要と経営というのを、どういうふうにやったらいいのかというようなことだというふうに思いますし。

もうちょっと申し上げますと、15ページに広域観光の推進ってありますが、このときの広域というのは、コンパクト、ネットワーク、対流で言われているネットワークと、どういうふうに関係してくるんだろうかということもあります。

それからすみません、成長産業であればインバウンドを連想しますというふうに申し上げたこととの関連で、もう1つ申し上げるのを忘れました。

インバウンドということで、世界市場、世界的な競争力のある観光地になっていくということに関しては、日本はまだまだなんですけれども、この観点からすると、東京、京都、北海道、そういったように、世界と勝負していけるようなところを強くした上で、その上で地域が続いていって、お客さんを取りにかかるという構造もあるので、やっぱり東京との関連というのは、観光においても書き分けが微妙だなというふうに思っている次第です。

最後になります。21ページにやはり観光の記述がございまして、⑤観光立国のさらなる展開ということでございますけれども、ここに記載されていることのちょっと项目的なところで、中身のポツがないところもありますが、拝見するだけに、2020年東京五輪を

土台にして、もう一歩さらなる展開をしていきたいと思いますということをお書きになるというところだと思いますけれども、そうであれば、東京五輪とか参考も踏まえた上で、ロンドンオリンピックは、オリンピックの大会の前と大会の最中とそのあとで、英国観光庁は投資の比率を2：2：6にしてあります。メガイベントの成果を定着させるには、刈取期の投資が非常に需要だという観点を持って成功に結びついたわけですが、そういう辺りのことも、国土形成計画であれば、視点があってもいいのではないかなというふうに思いました。

すみません、感想になります。以上です。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

一当たりご意見いただきましたが、追加して。

はい、じゃあ家田委員、お願いします。

(家田委員) さっき言わなかったことを2つだけ。1つは、13ページ第4節の東京一極集中の是正ということなんですけど、これは、言葉だけ読むと、うわあ、古臭いという感じを受ける人が多いんですね。また、読んでいる人もそうだし。とにかく一極集中はもうだめだよ、だから、首都機能移転だよ、もやったし、それから東京には工場を造っちゃいけないんだという法律もあったしね。

だけど、前回の時に、それを撤廃したんですね。それからまた、首都機能移転もワーワーワー議員たちが大騒ぎして議論して、それで結局、やめたわけですね。また、出てくる。

だから、別にどっちが悪いということをお願いじゃありませんけど、東京一極集中是正のことを進めるなら、ここまで国土計画なり国土的な施策が、それをどう扱ってきたか、その紆余曲折の歴史というのを何かここに述べておかないと、ちょっとでも昔のことを知っている人だと、またやってるの、これ、同じことの繰り返しで、議員たちは、そんなの知らないって言っているんですからね、ぜひ、そこは書いとくべきだと思います。

もう1つは、東京一極集中に関連して言うと、民需については、東京はいろんな立地しますよね。それで東京だけじゃないんですけど、都市再生なんていうのをずっと一生懸命やってきて、このところ10年、それでずいぶんビル建ちましたよね。

その一方で、例えば空港であるとか、あるいは環状の道路であるとか、そういうインフラの部分での大都市圏での投資というのは、わが国は大幅に遅れてきた国なんです。港もそうだし。それがものすごく今、ひずみになって、国土交通省困ってしまっているわけですね。例えば圏央道とか外環でキロ当たりの単価、ご存知だと思いますけど、普通の道路の10倍から20倍かかっているんですよ。それは、遅れたせいですよ。そのコストを今払わなきゃいけない。

だから、そういう二面性があるということは、要するに、均衡ある発展の中で地方をケアすることは大事なことは、僕はもちろん思うんですけど、一方で、大都市圏に必要な投資というのは怠ってきた国でもあるということは、ぜひ入れたい。

それから2つ目、部会長がおっしゃった国土軸の件なんですけど、国土軸については、歴史の中でとか地形であるとか地理を考えると、素直に形成されてきた交通軸ってありますね。昔で言えば瀬戸内海というのは、歴然たる交通軸だしね。とか、フォッサマグナも、糸魚川 - 静岡なんていうのは、もう塩の道の典型ですよ、のはあるんだけど、そういう素直な軸というのは今も重視すべきだし。

それからもう1つは、例えば日本海側なんかは国土交通軸、国土軸とか言っていますが、要するに、そこに陸上交通機関を造りたいからって言うので言っている面があるわけですよ。それを造ることによって、地域間の連関を運ぶと。別に国土軸というのと長いつながりがあるかないかなんていうのは、どうでもいい話で、地域の中でつながればいいんですね。だから、そういうところの種類の政治的な意味の国土軸って使ってきた面があることと。

最後にもう1つ申し上げたいのは、今わが国にとって必要な新しいタイプの国土軸というのは、もうちょっと地政学的にっていうか、国家の戦略として重要な小笠原から南鳥島に至る軸であるとか南西諸島の軸であるとか、こういうのが新しいタイプの国土軸ですよ。というのは、国土軸というのも、一言の国土軸として処理、整理するのではなくて、いろんな意図が違うものがあるというのを整理した上で言うのがいいかなと思いました。

以上です。

(奥野部会長) グローバル化とかICT化との関係との国土軸もあると思うんですよ。その辺のところは整理しなきゃいけない。

ちょっと高橋委員から来ていますが、高橋委員、坂村委員の順番で。ちょっとこれ時間のことがあるので、簡潔に。

(高橋委員) 本題の第1章の2番の異次元の高齢化の進展と東京の一極のお話を、ちょっとまとめてさせていただきます。

なぜ異次元の高齢化の進展が問題になっているかというのと、1955年から70年の間に、地方から三大都市圏に800万人の若い人が移動したんですね。これが50年たったというのが、この問題の根本になります。1955年に20歳で三大都市圏に移った人が2010年に、1970年に20歳で三大都市圏に移った人が2025年で75歳になると。今の年齢で言いますと、65歳から80歳の800万人が、地方から大都市圏に移ってきているというのが問題の根本になります。

これから一番困るのは誰かといいますと、大都市で困るのは75歳以降の方で、東京は介護のほうはもう壊滅的で、どうにもなりません。それから東京の周辺は、医療がこれから大変なことになります。

そこから移住という話が出てきたんですけども、もし65歳の夫婦が、東京から旦那さんの生まれた徳島に移ったらどうなるかという話をよくするんですけども、東京の30万円と徳島の20万円の使い勝手が同じだという話がよくあって、それから簡単なシミュレーションをすると、その夫婦が移住すると、2LDKが3LDKになる。おそらく夕

食のお品書きが1品増えるだろうし、東京で難しかった、孫と子供を連れての家族旅行が可能になるし。それから、脳卒中で倒れたときに、都内だったら急性期の医療がとっても心配ですけど、徳島に移ると、県立病院、市民病院、日赤と、一流の病院が大手を開いて受け入れてくれると。一番の差は、施設に入りたいといったときに、東京の100倍の確率で徳島なら入所できるようになるだろうと。

このような事実をもっと知らしめて、どこに行ったら幸せかっていう話を、うんとやるべきなんですね。

そうすると、ここは800万人のうちの200万人ぐらいの移住というのは十分可能であると。これは経済産業省でいつも話しているんですけども、産業として西日本の医療って、ものすごいんです。実は西日本で東日本の1.5倍、医療従事者がいるんですよ。その人たちの職がなくなるんですよ、人口が。それが移住することによって、その産業としても成り立つ面があると。

だから、廃人的なっていうか、ほんとに要介護度の非常に低くなってから行くというのは、ちょっと問題だと思うんだけど、早い時点で行って10年15年そこで生活をして、お金もうまく取る、それからボランティアで行くと、そういうライフスタイルを進めるべきだろうと。

そうすると、これもよく言うんですけども、これから行く世代に対しての結婚の雑誌もいいですけども、月刊インフラとか移住という雑誌を出して、ポジティブシニアライフみたいなのを次々に、いい移住先はどこだとか、1000万以下で温泉つきのセカンドライフをやるのはどこだっていうような、こういうようなことをやって、大都市部からリタイア層を200万人ぐらい移すというのを国策に掲げるといいのではないかと。それに併せてインフラをどう造るべきだと、生活のスタイルということを考えるべきじゃないか。

そうすると東京の一極集中の緩和の話にもなるし、東京の危機的な医療介護の緩和にもなると。それに応じて地方のほうも、そういう誘致合戦が始まるような形でインフラ整備という形をすることによって、この問題は十分緩和されるんじゃないかなというふうに思います。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

では坂村委員、お願いします。

(坂村委員) いろいろご意見聞いていて、ちょっと1つだけ気になったのは、コンパクトによって切り捨てられてしまうような地域があるというような印象を、もしも持たれるようだったら、これはよくないと思いました。

コンパクトとネットワークにより切り捨ててしまうようなところを作ろうなどということとは出てこないわけですが、もしもそういうイメージで受け止められてしまうとしたら、非常に問題なので、何かそういう誤解にだけはならないようにすべきだと思います。

特にさっき言いましたコンピュータネットワークは地方都市に関して特に重要だと見直されていて、高速ネットワークにより遠隔でも対面のように勤められたり医療が受けられ

たりという可能性が出てきています。例えば遠隔授業とか遠隔教育とか、大学でもMOOCsとかいろんなものが出てきて、また、医療もロボット手術とか、そういう技術がどんどん出てきてるわけで、そういう設備をつけたところでは東京にいなくてもいいというような、成功事例がいろいろ最近出てきています。

そういうようなことを考えると、ネットワークという中のコンピュータネットワークが国土の形成に与える影響は今強いと思っていて、そういうような新しい技術を背景に、何か切り捨てるためにコンパクトをするんじゃないというようなこととか、新しい可能性が出てきて、東京一極集中だけじゃないっていうような——考え方の変化も出てきているし自然回帰とかも、見直されている。そういうイメージを出さないと、コンパクトにして、東京以外はだめになってしまうみたいないように取られるのは、ちょっと違うかなと思いました。

(奥野部会長) その点については国交省のほうも、コンパクトの中身をあじさい型とか団子と串型とか、それぞれ整理しだしちゃって構図をいろんな方向で、切り捨てるという方向ではなくて、地域地域の歴史・文化をちゃんと残していくと、創造していくということをベースにしながら、こういうことは非常に大事であります。切り捨てるということではないというふうに私も理解しております。

そろそろ、よろしゅうございますか。何か部屋もだいぶ冷えておるといふことで。

それでは、そろそろ時間にもなっておりますので、今日はこれぐらいにさせていただきますが、私今日最初に発言をさせていただきました。その後の皆さんのお話を聞いても、やっぱりこの議論、第6回目の次のフェーズに移ってきたかなという感じがいたします。

まだ仕上げの段階というわけではございませんけれども、このだいぶ手前でありますけれども、やっぱり議論が次のフェーズに移ってきたんだらうというふうに思います。

今年度は今年が、本年ですね、今年がこれが最後でございます、今日は、また新しい視点からの議論が出てきておまして、これ事務局、大変だらうと思っておりますけれども、それを入れてまとめていただきたい、中間整理をしていただけないか、もう6回やりましたので、いうふうに思います。

中間整理については、私のほうでまた確認をさせていただいて、来年ももちろん議論は続きますから、それをベースにして、また来年議論を続けていただければというふうに思いますが、そういうことで、よろしゅうございましょうか。はい、ありがとうございます。

それでは、本日の議論は、これぐらいにしたいと思っております。

最後に事務局のほう、議論をお聞きになって、これだけは言っておきたいということがございますか、内容的に。よろしゅうございますか。はい、ありがとうございます。

はい。

(国土政策局総合計画課長) すみません。大変ありがとうございました。

すべて私どもの文章が分かりにくいということのご指摘かと思っておりますので、工夫

をさせていただきたいと思っております。

ちょっと一言だけ。

今後、基本的には国土政策でございますので、人口減少に対する適応策を中心に書かせていただいているつもりだったんでございますけれども、今日、岡部委員から、緩和策としての何か書けてないかというお話もございましたし、そこら辺のご意見等は、ぜひ今後また議論を詰めて、させていただければというふうに思っております。

それから、ちょっと広域地方計画の関係がありましたので、一言だけ申し上げます。

国土形成計画については3部構成になっておりまして、3部のところで広域地方計画との関係を書くようになってございますので、ちょっと薄かったんですが、そのところは、また、確かに前の計画のようなつながりがなかなか作りづらくなっておりまして、そこもまた今後もご議論いただければありがたいなというふうに思っております。

それからあと、コンパクトが地方の地域の切り捨てにつながらないようにという、事務局としてはそういうつもりで書いてございますけれども、そのところ、また今日いろいろご意見がございましたし藤原委員のご意見もございましたので、その整理の仕方につきましては、おそらく第3章のところを具体的に書いていく中で、いろいろまたご議論があると思いますので、そこに引き続きご議論いただければ、ありがたいなと思っております。

以上でございます。

(奥野部会長) はい、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、本日の計画部会は終了させていただきます。

あと事務局から、連絡事項等お願いします。

(国土政策局総務課長) 本日もご議論いただきました中間整理につきましては、部会長にご相談の上、内容を整理して公表させていただきたいと考えております。

また、次回以降の計画部会につきましては、今後、日程の調整をさせていただきたいと考えておりますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

また、本日お配りいたしました資料は、席にそのままお置きいただければ、事務局からお送りさせていただきます。

本日は、どうもありがとうございました。